

# 江戸時代の旅と越後の名所

渡部 浩 二

- I. はじめに一旅先としての越後
- II. 出版物からみた越後の名所
  - (1) 二十四輩巡拝案内書類
  - (2) 講中出版の道中記類
  - (3) 刊行越後国絵図類
- III. 旅日記・紀行文からみた越後の名所
  - (1) 東北地方の伊勢参宮旅日記から
  - (2) 文人層・知識人層の紀行文から
  - (3) 越後の旅における書物の受容
- IV. おわりに

## I. はじめに一旅先としての越後

江戸時代の旅については多くの研究蓄積があり、近年も様々な視点で研究がなされている<sup>1)</sup>。新潟県においても自治体史などで、旅日記を素材に越後国の人々の伊勢参宮・西国巡礼をはじめとする旅の事例が豊富に紹介されている。一方、越後は主要街道である五街道から外れた位置にあり、また、冬場の積雪量も多く、旅先としては必ずしも好条件ではないこともあってか、越後を訪れた旅人の経路・行程や彼らが訪れた越後の名所の検討といった、旅先としての越後に視点を置くような研究は十分ではない。

しかし、江戸時代中期以降、宗教的な遺跡巡拝が盛んになると、親鸞配流の地であった越後に来訪してゆかりの地をめぐる人々も多くなった。また、東北地方の人々の間にも伊

勢参宮・西国巡礼が盛んになると、越後はその往路や復路として多くの人々が行き交った。そして、他国から多くの文人たちも頻繁に越後に来訪するようにもなった。

本稿では、そのような状況下において、旅人が訪れた越後の名所はどこであったのかを探ることを目的とし、まず、それらが旅行案内書である道中記や絵図などの出版物にどのように反映されていたのかについて基礎的分析を行う。そして、旅日記や紀行文などを素材に、越後での経路や旅程に留意しながら、旅人が実際に訪れた越後の名所について検討を行うとともに、出版文化と旅の大衆化の因果関係の一端についても検討する。

## II. 出版物からみた越後の名所

### (1) 二十四輩巡拝案内書類

江戸時代には旅の隆盛に伴い、旅行案内書である多様な「道中記」が数多く刊行された<sup>2)</sup>。それは街道や宿場、主要な名所などの簡単な情報が記された、携帯に便利な小型の出版物である。17世紀中頃からの刊行が確認されているが、東海道をはじめとする五街道の案内が中心である。越後の道中について触れるものはわずかで、記述も簡略である<sup>3)</sup>。越後の道中が大きく取り上げられるようになるのは、18世紀中頃以降に刊行された「二十四輩巡拝」関係の道中記によってと考えられる。

江戸時代には、西国三十三ヶ所巡りをはじめ

---

キーワード：旅、越後、二十四輩巡拝、名所、越後七不思議

めとして、宗教的な遺跡巡拝の旅が庶民レベルで盛んとなったが、浄土真宗の開祖親鸞およびその高弟24人ゆかりの遺跡などをめぐる「二十四輩巡拝」もそのひとつである。越後は、親鸞が建永2(1207)年に配流されてから建保2(1214)年までの約7年間滞在した地でゆかりの遺跡も多く、二十四輩巡拝の目的地のひとつであった。

二十四輩巡拝にかかわる刊行書としては、享保16(1731)年の竹内寿庵『親鸞聖人御旧跡并二十四輩記』が、その前年に達成された実際の巡拝の記録であり、同時に道中案内記を兼ねた初期のものとされている<sup>4)</sup>。そして、宝暦5(1755)年には遠州掛川の紅玉堂楓司が『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』を著した。本書は、旅行者の実用目的に刊行され、なおかつ越後の道中の情報を含んだ初期の道中記のひとつと考えられる。刊行の背景には、宝暦11(1761)年の親鸞500年遠忌を契機とする二十四輩巡拝の隆盛を当て込んだとする考えもある<sup>5)</sup>。旅の携帯に便利な袖珍本の形態をとり、宝暦10(1760)年、享和元(1801)年と何度か版を重ね、広く流布したようである。凡例では、

近年御法流益々繁昌して、聖人の御跡をしたひ奉り、北国の御旧跡、関東廿四輩巡拝の輩多し、しかれども南部の本誓寺、仙台の称念寺などハ行程遠きとのミ聞て道法をもしろず、越後新発田辺より皆もどりて、信濃路を経て江戸へ出、或ハ下野の宇津の宮辺江出る人多く、南部江廻る人稀なり(中略)北国より関東江廻りたる順路委細にしるして参詣の者の便りとす<sup>6)</sup>

と、南部の盛岡や仙台といった奥州筋の遺跡への巡路を示すことを刊行の大きな目的としているが、既に18世紀中頃には越後の新発田あたりまでは相当数の巡拝者がいたことを

示唆している。

本書の示す巡拝行程の概要は、京都から出発し、北陸から越後・信濃・上野・下野などを巡って南部の盛岡を経由、奥州街道を南下して日光から江戸に入り、東海道、中山道を経て、再び京都に戻るというものである。

本書は二十四輩巡拝の目的で刊行されたものであるが、道中の二十四輩巡拝に直接関係しない社寺や名所・旧跡の情報も記載されている。とりわけ巻頭の凡例には、北国筋の馬継、宿駅、茶屋等の事情を述べる他に、道中の見所として越後の「がらめき村油の湧所」と「同村火の出る所」について以下のように特記している。

一、越後がらめき村油の湧所八山の中だんに有、さし渡し三間四方程有、水の湧かへる事釜にて湯のにへかへるがごとし、其水に油まじりて出る也、又山の麓に深八九間程に井戸のやうに掘、油をくむ、是ハ生の油にて出る、五六ヶ所も有、左右は田畑也、案内を頼て行べし<sup>7)</sup>

一、同村火の出る所、丈七といふ者のいろりの角土だんに小サなる穴あり、夫より出る、昼ハ消して置、望の者あれバ右の穴へ三寸廻り程の竹の式尺斗有をさし込、扱いわうに火をつけ、竹の口へすれハ其まま中より火もえ出る也(後略)<sup>8)</sup>

前者は、「越後七不思議」<sup>9)</sup>のひとつに数えられる「燃水」(石油のこと。「草水」「草水油」「臭水」「臭水油」などともいう)の自噴する場所(「油井」「煮壺」)のひとつで、ここでは蒲原郡柄目木村周辺にみられたものを指す。後者も「越後七不思議」のひとつに数えられる「火井」(天然ガス井のこと。「陰火」などともいう)のひとつで、同じく柄目木村の丈七宅を指す。囲炉裏に刺した竹筒先から出る天然ガスを見ることができた。

このような見所としての「越後七不思議」に関する記載は本文中にも示されており、行程順に抽出すると次のようになる（括弧内が七不思議）。

－高田－柏崎－出雲崎－寺泊－（弘智法印）  
 －弥彦－三条－（如法寺の火井）－加茂－田上（繫樞）－新津－柄目木（火井、油井）－小嶋（八房梅、珠数掛桜）－保田（三度栗）－鳥屋野（逆竹）－新潟－新発田－村上－

「越後七不思議」に何を数えるのかは江戸時代から諸説あるが、①即身仏（三島郡野積村の真言宗西生寺にある日本最古の即身仏ともいわれる「弘智法印」）、②当時珍しかった石油（「油井」）や天然ガス（「火井」）など越後独特の風土・自然現象に関するもの、③親鸞の教化活動の伝承に関するもの（「繫樞」〔糸でつないだ穴の跡がある樞の実〕、「八房梅」〔1つの花に8つの実がつく梅〕、「珠数掛桜」〔数珠状に花が咲く桜〕、「三度栗」〔1年に3度も実る栗〕、「逆竹」〔逆方向に枝葉が茂る竹〕など）などが主要なものにあげられる。そして、その多くが下越地域に集中しており、本書ではそれらを二十四輩巡拝関係遺跡と合わせて組み入れ、巡回ルートとしていたことがわかる（図1）。③は二十四輩巡拝関係遺跡に含まれるものであるが、①、②は本来無関係のものである。

この後も二十四輩巡拝関係の案内書類の刊行は続き、明和4（1767）年には江州八幡の嶋屋長次が『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』<sup>10</sup>を著し、版を重ねた。凡例によれば、「抑近年法儀繁昌いたすにつき、御旧跡二十四輩の寺々道のり相定<sup>あいさだまり</sup>申候」と二十四輩巡拝流行を述べ、自ら宝暦7（1757）年、同9（1759）年、同13（1763）年、明和2（1765）年の計4回にわたって、それぞれ120～250日もかけて実際に踏破して道順を確かめたとある。本書も前述の『親鸞聖人御旧跡二十四輩巡

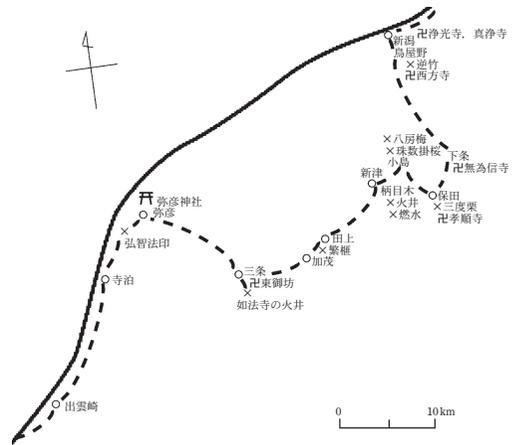


図1 『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』の越後の巡拝ルート（部分）

注）○は宿場。×は越後七不思議に数えられるもの。

拝記』と同じく袖珍本の体裁をとり、携帯実用の便が考慮されたものとなっている。越後における巡回ルートや「越後七不思議」に関する記載も、細部の違いはあるものの基本的には『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』を踏襲した内容となっている（図2）。

享和3（1803）年には、了貞著『二十四輩順拝図会』前編五卷<sup>11</sup>が刊行されて広く流布した。とりわけ巻之四において越後の関係遺跡とともに、それ以外の名所（「越後七不思議」に数えられる「光智法印」〔火井〕〔草水の油〕など）も挿絵入りで紹介されることになった（図3、図4）。天保15（1844）年には、『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』や『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』を踏襲した道中記である池田東籬編『廿四輩御旧跡道しるべ』<sup>12</sup>が刊行されるなどしている。

さらに、幕末期頃には「越後国二十四輩御旧跡并名所之図」<sup>13</sup>という越後国内で完結する彩色刷の案内図も刊行された（図5）。本図も題のとおり、「二十四輩御旧跡」に「越後七不思議」や弥彦神社、乙宝寺、菅谷不動尊などの名所を組み入れて、巡回ルートとして示している。これは、先行道中記の全くの模

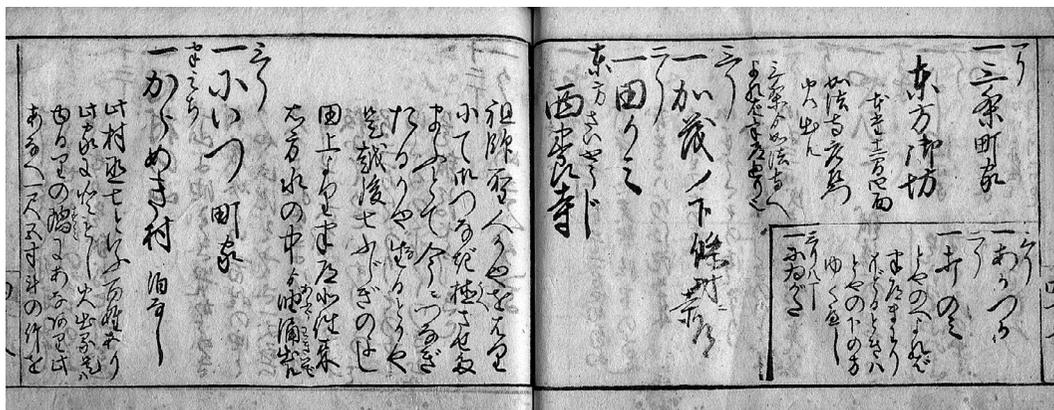


図2 『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』

(刊行年不明, 新潟県立歴史博物館蔵)



図3 『二十四輩順拝図会』巻之四 「火井」

(享和3(1803)年, 新潟県立歴史博物館蔵)

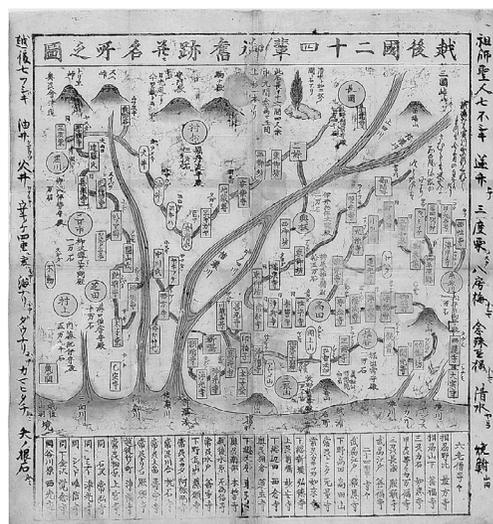


図5 「越後国二十四輩御旧跡并名所之図」(上)と部分拡大図(下)

(刊行年不明, 新潟県立歴史博物館蔵)

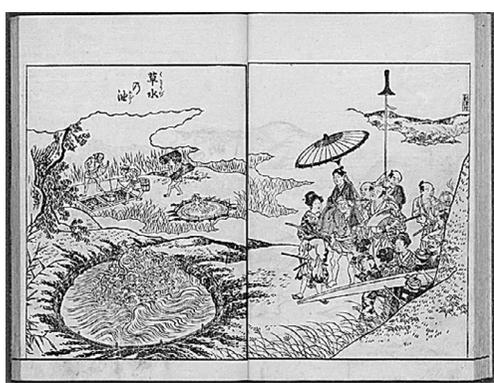


図4 『二十四輩順拝図会』巻之四 「草水の油」

(享和3(1803)年, 新潟県立歴史博物館蔵)

倣ではなく、従来のルート上に文化4(1807)年に発見されたという清泉「幸清水」(蒲原郡新津村)や親鸞伝説にかかわる「魚形石」(蒲原郡村杉村)などのより詳細な情報も追加したものになっている。

以上のように、江戸時代中期以降、多様な二十四輩巡拝案内関係出版物の刊行が確認され、その需要が垣間見られる。そこからは、主に下越地域周辺に分布する「越後七不思議」に関するものが名所とされていることが確認される。

## (2) 講中出版の道中記類

次に、江戸時代の旅宿組合である「浪花講」,「東講」などが出版した道中記や講に加入する旅宿が刊行した出版物などから越後の名所について検討する。

浪花講は、19世紀初頭に本邦初の旅宿組合として成立した。大坂の松屋甚四郎と江戸の鍋屋甚八が講元となり、甚四郎の手代松屋源助が发起人となって浪花組の名前で始めたもので、天保12(1841)年に改名したという。天保10(1839)年刊行の『浪花組道中記』<sup>14)</sup>には、越後の加入旅宿の紹介のみでなく、「寺泊」と「弥彦」の間には「此間弥彦山なり光智法印の入室の所なり」,「弥彦」の箇所には「此所弥彦明神なり」といったように道中筋の名所の記載がみられる。

その後、安政2(1855)年に江戸の大城屋良助が发起人となって東講が成立すると、越後の多くの旅宿も加入した。そして、同5年に東講が刊行した『五海道中細見記』<sup>15)</sup>にも、野積(「弘知法印」),弥彦(「越後一ノ宮伊夜彦大明神」),如法寺(「此所地より火出る」),田上(「つなぎかや」),からめき(「にへつぼ」),小嶋(「ハツふさの梅」,「じゆずかけ桜」),保田(「三どぐり」)といった「越後七不思議」に関わる越後の名所と位置が示されている(図6)。

また、幕末期に関東地方の諸国図も手がけ

た江戸の書肆・菊屋幸三郎が講元である関東講が刊行した『関東講定休宿帳』<sup>16)</sup>にも、「新潟より名所旧跡めぐり」として、「小じまハツうめの御旧跡」,「ほた(保田)三度栗御旧跡」,「ゆた上田上 つなぎかや御旧跡」,鳥屋野の逆竹,平嶋の川越御名号といった親鸞関係の「越後七不思議」に関する名所旧跡までの距離が記されている。

このような講に加入する越後の旅宿が周辺の名所旧跡を宣伝することも行われた。たとえば、浪花講加入旅宿である菅谷不動尊門前の米沢屋七兵衛は、「越後諸方并名所旧跡図」<sup>17)</sup>という版木を製作し、宿の宣伝を兼ねて周辺の名所旧跡を案内している(図7)。菅谷不動尊は日本三大不動尊のひとつにも数えられ、特に眼病に効験あらたかといわれて賑わった越後有数の参詣地である。ここで名

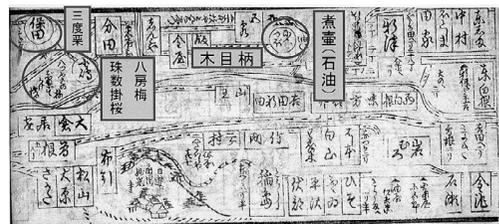


図6 『五海道中細見記』(一部加筆)  
(安政5(1858)年,新潟県立歴史博物館蔵)

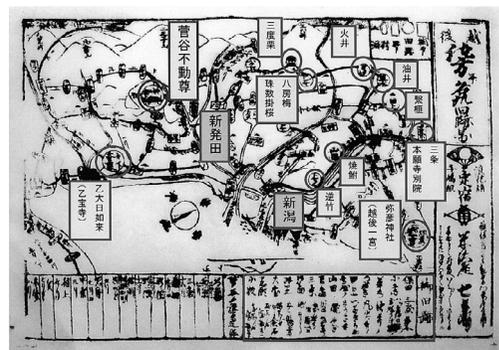


図7 「越後諸方并名所旧跡図」(一部加筆)  
(刊行年不明,『新発田市史資料第四卷近世庶民資料』(下)1969より)

所旧跡としてあげられているのは、前述した道中記類に示されているものと同様、親鸞関係の「越後七不思議」を中心とするもので、それに加えて菅谷不動尊、乙宝寺、弥彦神社などの周辺の代表的な社寺が示されている。

### (3) 刊行越後国絵図類

鈴木牧之『北越雪譜』とともに越後の二大奇書として知られ、文化9(1812)年に江戸の永寿堂から刊行された橋崑崙『北越奇談』巻一の巻頭には、

凡諸国遊歴の客名所古跡を探んとするの志ある人は、必ずまづ其国の地理を知らずんばあるべからず。道路の順逆によりて空しく、草鞋を費すのみならず、わづか数十歩の違にして名勝を見おとしたるは残情の止めがたきものなり。ここにおゐて今北越二三の勝所をあげて風遊の子にたよりするものなり。<sup>18)</sup>

と、越後を訪れる旅人を意識し、越後の代表的な「勝所」を列記するとともに(表1)、「名所」「旧跡」を付した地図を示した(「勝所」と「名所」「旧跡」に示された内容は一致しておらず、一部相違がある)。高田、長岡、新発田、村上といった繁華地としての越後の主要な城下町や日本海沿岸部を中心とした景勝、国分寺、弥彦神社、大日堂(乙宝寺)など主要な社寺とともに、越後の「七奇」に数えられる如法寺村の「火井」や「燃ゆる水」、「弘智法印」、「八房梅」、「無縫塔」<sup>19)</sup>などがあげられている。橋崑崙は越後・佐渡の地図制作も手がけており<sup>20)</sup>、旅するにあたって地図の必要性を認識していたのであろう。この図は後に、江戸時代後末期の儒学者で越後高田藩にかかえられた東條琴台の題一言が付されて一枚刷で刊行された(図8)。

上記のように江戸時代に刊行された越後国

表1 『北越奇談』に記される越後の「勝所」

勝所	勝所の説明等
市振	親不知という難所あり
鍋が浦	名立と有間川の間、益山奇石多し
居多	親鸞上人旧跡
五智	国分寺五智如来有
今町	直江津春日新田への今渡、応化の橋あとや
関川	
高田	榊原侯15万石御城下、直江町今あふげの橋、この橋上妙高山の眺望よし
春日林泉寺	上杉輝虎公旧跡
柿崎	親鸞上人旧跡、是より米山かけこし鯨波へ6里
米山下通	
上ヶ輪	弁慶力餅、産水あり
笠島	奇石あり、黒海苔名産
青海川	景色より山々一望、桜多し
鯨波	鬼ヶ洞というあり
柏崎	縮を見るには小千谷へ出づべし、山路9里、長岡へすぐに出るには8里
長岡	牧野侯7万4千石御城下、悠久山の宮へ18丁、これ勝地なり、桜の時ことによし、三条へ6里
如法寺村	火井、七奇の一、三条へ20丁
三条	東本願寺掛所あり、本成寺へ18丁
弥彦	一の宮明神、国上山へ1里、風穴あり、野積弘智法印即身仏なり1里
角田浜	絶景なり、1里のまはり、新潟へ5里、赤塚の下へ出る
新潟	湊入舟景色よし、鳥屋野へ1里、是より舟にて何くへも通行よし
小島	八房梅
草水	燃ゆる水、七奇の一、油の涌池あり
河内谷	永谷寺、七奇の一、無縫塔、此所五泉より山々入こと三里
水原	福島潟のほとりを通り3里、こしの湖なり
新発田	溝口侯5万石御城下、聖籠の松原を通り8里
乙村	大日堂
村上	内藤侯御城下5万石
蒲崎	葡萄とも書、矢葺の明神



図8 「越後国略図」

(刊行年不明、新潟県立歴史博物館蔵)

の一国絵図は他国に比して多く存在し、20点余も知られている<sup>21)</sup>。それらの凡例に「名所」「旧跡」が示されるのは数例ほどで、初見は文化14(1817)年に越後の地理学者小泉其明が制作した「越後全図」<sup>22)</sup>と思われる。

そこで示されている越後の「名所旧跡」は、やはり「越後七不思議」に関わる「八房梅」、「三度栗」、「逆竹」、「無縫塔」、「塩井」<sup>23)</sup>などである。また、「神祠」「仏寺」の凡例も示され、越後一之宮の弥彦神社や、乙宝寺、菅谷不動尊、国分寺など主要なものの位置が示されている。なお、本図は「新斥」の「佐幸吉」ら4名が鐫字しており、越後国内で刊行された可能性がある。

天保13(1842)年に京都で刊行された「越後国細見図」(池田東籬編・図、近江屋佐太郎・山城屋佐兵衛版)<sup>24)</sup>は、図面左上に「名所・寺社・名物」の情報が示されている。「越後七不思議」に関係する「臭水油」(蒲原郡黒川村)、「陰火」(蒲原郡入方村)、「紫竹林」、「八房梅」、「三度栗」などがあげられている。ただし、その記載内容は、大坂杏林堂より正徳3(1713)年頃に刊行されたという寺島良安『和漢三才図会』の記載に準じたもので、当時の越後の名所の情報を必ずしも正確に示していないようである。

慶応4(1868)年刊「北越名所旧跡奇物名産地理案内之全図」(図9)は越後国蒲原郡の人の撰によるもので、情報が詳細である。凡例には、「旅人或八旧跡或、好事之人二令懐中之、名所旧跡之道程為令一人案内委敷図ニ記シ今般令新撰者也」と、名所旧跡を訪れる旅人の道案内のために制作したことが記されている。本図は特に越後七不思議の案内に力点を置き、河伯(かっば)や鎌馳(かまいたち)などを「怪異七奇」、火井や燃水を「名産七奇」、即身仏(弘智法印)を「奇特七奇」といったように7種類に分類・整理して示すとともに、それら一部については場所を絵図上に落としている。

以上の絵図で示されている越後の名所は、前述した道中記類に示されているものと同様、「越後七不思議」に関係するものが中心で、それらに加えて弥彦神社や、乙宝寺、菅谷不動尊、国分寺などの代表的な社寺が示さ

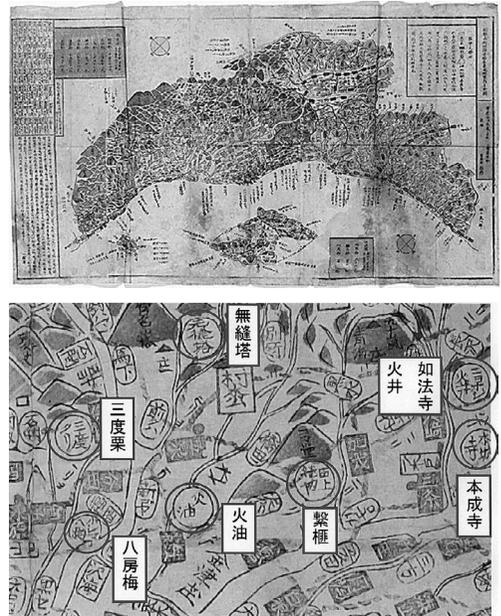


図9 「北越名所旧跡奇物名産地理案内之全図」(上)と部分拡大図(下、一部加筆)  
(慶応4(1868)年、新潟県立歴史博物館蔵)

れていることが確認できる。

これらの絵図類が実際に旅人に利用された実用的なものであったか明確ではない。しかし、越後の絵図制作についても19世紀以降、旅の隆盛を背景に名所旧跡の情報を盛り込むような動きが確認される。

なお、一枚刷の絵図ではないが、「親鸞聖人御旧跡」や越後の郡ごとの「神社仏閣名所旧跡」などの情報が盛り込まれ、幕末の越後便覧ともいうべき書籍である元治元(1864)年刊『越後土産』<sup>26)</sup>も同様な時代背景から刊行されたものといえよう。

### Ⅲ. 旅日記・紀行文からみた越後の名所

#### (1) 東北地方の伊勢参宮旅日記から

江戸時代中期以降、東北地方の人々の間にも伊勢参宮・西国巡礼が盛んになると、越後はその往路や復路として多くの人々が行き交った。表2は、先行研究<sup>27)</sup>によって紹介されている東北地方の人々の伊勢参宮・西国

表2 東北地方の伊勢参宮日記類にみる越後での行程と訪れた名所

No.	県名	表題など	出発年月	人数	総日数	越後国通過期間	往復	越後での行程と訪れた名所 (括弧内)	出典
1	秋田	—	寛保3年(1743)4月	6	85	6月1日～8日	7泊8日	複路 善光寺—●関川—高田—●湯町—鉢崎—(産清水等)—柏崎—●椎谷—出雲崎—寺泊(弘智法印)—●弥彦(弥彦神社)—新潟—●松ヶ崎—嶋見—次第浜—●村上—葡萄—●小俣—	大森町郷土史編さん委員会編『大森町郷土史』大森町, 1981
2	福島	上方道中記	明和4年(1767)3月	4	106	6月24日～7月2日	8泊9日	複路 善光寺—関川—●関山—高田—●今町—鉢崎—●鯉波—●柏崎—出雲崎—●寺泊—弥彦(弥彦神社)—●赤塚—●新潟—新発田—●米倉—●津川—	磐梯町史編纂委員会編『磐梯町史 資料編Ⅲ 近世の磐梯町』磐梯町, 1992
3	山形	伊勢参宮道中記	明和5年(1768)12月	10	66	2月15日～21日か	6泊7日	複路 善光寺—関川—高田—(国分寺)—●今町—●鉢崎—柏崎—●出雲崎—寺泊(弘智法印)—弥彦—●内野—新潟—新崎—内嶋江—●真野—築地—乙(乙宝寺)—大島—関—●畑—小国	高島町史編纂委員会編『高島町史 中巻』高島町, 1976
4	秋田	旅日記	寛政3年(1791)4月	不明	不明	7月5日～11日	6泊7日	複路 善光寺—関川—高田—●春日新田—●柏崎—(弘智法印)—●弥彦—●内野—新潟—松ヶ崎—●築地—村上—●塩野町—葡萄—●小俣—	上小阿仁村郷土史編さん委員会編『上小阿仁村郷土史 資料編第一集』上小阿仁村教育委員会, 1973
5	山形	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	文化2年(1805)11月	不明	60	1月2日～9日	7泊8日	複路 善光寺—●大谷—高田—●黒井—柏崎—●荒浜—●寺泊(弘智法印)—弥彦(弥彦山)—●新潟—●新発田—菅谷(菅谷不動尊)—乙(乙宝寺)—●殿治屋敷—小国—	長井市史編纂委員会編『長井市史 第二巻(近世編)』長井市, 1982
6	秋田	伊勢参宮道中記	文化8年(1811)閏2月	22	84	閏2月24日～3月3日	9泊10日	往路 鼠ヶ関—●大川—(矢吹明神)—葡萄—●塩野町—村上—(岩船神社)—岩船—●塩屋—乙(乙宝寺)—築地—●元町—真野—●新潟—弥彦(弥彦神社)—●鹿—●寺泊—出雲崎—●椎谷—柏崎—(弁慶茶屋, 産清水)—●柿崎—今町—(国分寺)—高田—●新井—善光寺	姉崎岩蔵『生駒藩史』矢島町公民館, 1976
7	岩手	伊勢参宮道中記	文化9年(1812)2月	28	約120か	5月23日～29日	6泊7日	複路 善光寺—関川—●新井—高田—●鉢崎—柏崎(石地藏)—出雲崎—●寺泊—熊ノ森—●新潟—松ヶ崎—木崎—真野原—●築地—乙(乙宝寺)—●桃崎—塩屋—岩船—村上—●葡萄—●小俣—	田老町教育委員会編『田老町史資料集(近世三)』田老町教育委員会, 1992
8	岩手	参宮道中覚	文政6年(1823)正月	不明	約85か	3月下旬	6泊7日か	複路 善光寺—関川—●新井—高田—●黒井—●柿崎—(弁慶茶屋)—柏崎—●宮川—出雲崎—寺泊—弥彦(弥彦神社)—●新潟—●木崎—築地—乙(乙宝寺)—●岩船—●大崎(大沢力)—	沢内村史編纂委員会編『沢内村史資料 第一集』沢内村教育委員会, 1986
9	岩手	西国・四国順礼道中記	文政7年(1824)3月	不明	約140か	7月17日～23日	6泊7日	複路 善光寺—関川—●大田切—高田—●柿崎—鉢崎—(弁慶茶屋, 産清水)—柏崎—●石地—出雲崎—寺泊(弘智法印)—弥彦(弥彦神社)—●内野—新潟—木崎—真野—●本町—●築地—乙(乙宝寺)—●桃崎—村上—●葡萄—●小俣—	田老町教育委員会編『田老町史資料集(近世三)』田老町教育委員会, 1992
10	山形	伊勢道中記上	文政9年(1826)正月	6	89	4月6日～12日	6泊7日	複路 善光寺—関川—●二俣—高田—●湯町—柏崎(石地藏)—●石地—出雲崎—寺泊—弥彦(弥彦神社)—●赤塚—●新潟—木崎—●新発田—菅谷(菅谷不動尊)—乙(乙宝寺)—●村上—葡萄—(矢吹明神)—小俣	立川町史編さん委員会編『立川町史資料 第五号』立川町, 1993
11	山形	伊勢并大和廻道中記	文政11年(1828)正月	不明	73	3月29日～4月5日	6泊7日	複路 善光寺—関川—●高田—●柏崎—出雲崎—●寺泊—弥彦(弥彦神社)—●新潟—●松ヶ崎—木崎—新発田—●菅谷(菅谷不動尊)—乙(乙宝寺)—●村上—塩野町—葡萄—●小俣—	八幡町教育委員会編『八幡町史 資料編二』八幡町教育委員会, 1971
12	山形	伊勢参宮花能笠日記	文政11年(1828)正月	4	115	4月26日～5月9日	11泊	複路 ●●外波—●有馬川—高田—●関川—善光寺—牟礼—●高田—●柏崎—●長岡—見附—如法寺(火井)—三条(三条御坊)—●大野—●新潟—木崎—新発田—●菅谷(菅谷不動尊)—乙(乙宝寺)—大島—関—●川口—	寒河江市史編さん委員会編『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会, 1977
13	福島	—	文政13年(1830)正月	9	88	3月30日～閏3月7日	7泊8日	複路 善光寺—関川—●二股—高田—●湯町—柏崎—●椎谷—出雲崎—寺泊(弘智法印)—弥彦(弥彦神社)—●岩室—●新潟—新発田—●米倉—津川—●野村—	高郷村史編纂委員会編『会津高郷村史』福島県耶麻郡高郷村, 1981
14	山形	なし	天保2年(1831)11月	不明	80	1月26日～2月4日	8泊9日	複路 善光寺—●関川—●高田—●柏崎—出雲崎—●寺泊—弥彦—●新潟—●新川—新発田—●菅谷(菅谷不動尊)—築地—乙(乙宝寺)—●関—	那須貞太郎編『西川町史編纂資料 第十一号』西川町教育委員会, 1980
15	宮城	道中記覚	天保6年(1835)2月	12	不明	4月25日～5月2日	7泊8日	複路 善光寺—●関山—高田—●湯町—柏崎—●宮川—出雲崎—寺泊—●弥彦—●新潟—新発田—●加治—菅谷(菅谷不動尊)—乙(乙宝寺)—●上関—	多賀城市史編纂委員会編『多賀城市史 第5巻 歴史史料(二)』多賀城市, 1985
16	秋田	—	天保7年(1836)正月	6	94	4月17日～23日	6泊7日	複路 善光寺—関川—●新井—高田—(国分寺)—黒井—●鉢崎—柏崎—出雲崎—●山田—寺泊(弘智法印)—弥彦(弥彦神社)—●新潟—築地—●乙(乙宝寺)—村上—●中村—葡萄(矢吹明神)—小俣	『中仙町郷土史資料 第三集』秋田県仙北郡中仙町郷土史編さん委員会, 1974
17	岩手	参宮道草叢	天保10年(1839)5月	11	不明	9月18日～27日	9泊10日	複路 善光寺—●関川—●高田—(居多神社)—今町—●鉢崎—柏崎(石地藏)—●石地—出雲崎—寺泊(弘智法印)—弥彦(弥彦神社)—●新潟—●海老ヶ瀬—●築地—乙(乙宝寺)—●桃崎—塩屋(塩釜大明神)—岩船(岩船神社)—村上—●塩野町—葡萄(矢吹明神)—小俣	独協医科大学教養医学科編『独協医科大学教養医学科紀要 第9号』独協医科大学教養医学科, 1986



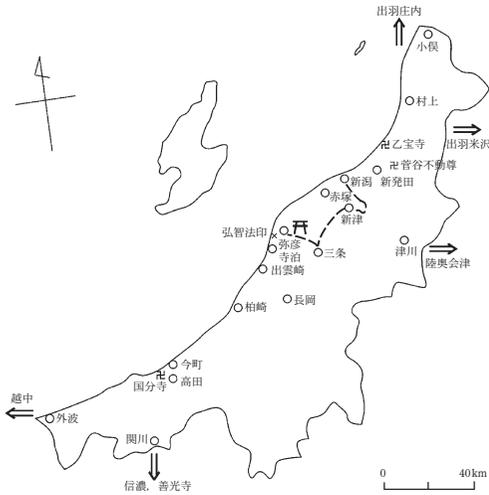


図10 越後の主要な宿場と二十四輩巡拝ルート(部分)

注) ○は表2に関係する主要な宿場。  
×は表2に関係する越後七不思議。

我北地に至りしは九月より三月の頃なれば、途中にて旅人には絶えて逢う事なかりし。我旅行は医術修行の為なれば、格別の事也。只名所をのみ探らんとの心にて行く人は、必ず四月以後に行くべき国なり<sup>31)</sup>

しかし、表1からは、気候の厳しい冬期に越後を通過する旅人が一定数いることがわかる(No. 5, 14, 20, 25など)。これは東北地方の人々の伊勢参宮の時期が農閑期に多いことと連動していよう。

(2) 文人層・知識人層の紀行文から

江戸時代に越後を訪れた文人層・知識人層を中心とする人々の紀行文などから、彼らが訪れた越後の名所を表3にまとめた。彼らが越後を訪れた目的は多様であり、その行程も一様でない。

7 (1795) 年に刊行された『東遊記』巻一において次のように記している。

No. 1～3は、東北地方の伊勢参宮旅日記

表3 越後の紀行文と訪れた名所

No.	史料名	筆者(属性)	年次	訪れた名所														
				国分寺	※弘智法印	弥彦神社	※繁樵	※如法寺の火井	※柄目木の油井	※柄目木の火井	※八房梅	※珠数掛桜	※三度栗	※逆竹	菅谷不動尊	乙宝寺		
1	『日本行脚文集』	大淀三千風(俳人)	天和3 (1683)	○	○													
2	『曾良旅日記』	河合曾良(俳人)	元禄2 (1689)	○	○													○
3	『紀行笈の若葉』	建部綾足(俳人)	元文4 (1739)		○	○												○
4	『東奥紀行』	長久保赤水(常陸の地理学者)	宝暦10(1760)								○	○			○	○		
5	『東海濟勝記』	三浦迂斎(播州の大庄屋)	宝暦12(1762)	○		○				○	○						△	
6	『東路露分衣』『式拾四輩并御旧跡経廻牒』	内田逸峰(越中の農豪, 歌人)	明和元(1764)	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○			
7	『高志栞』, 『粉本稿』など	菅江真澄(国学者)	天明4 (1784)	△	△	△	△											△
8	『東遊記』	橘南谿(京都の医者)	天明6 (1786)			△	○	△		△		△	△	△	△			
9	『北越志』	亀井協従(武蔵の名主, 博物学者)	寛政12(1800)			△		○	○	○				○				△
10	『金草鞋』第8編	十返舎一九(戯作者)	文化12(1815)			○					○	○						
11	『日本九峰修行日記』	野田成亮(日向の修験)	文化13(1816)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	『滑稽旅鳥』	十返舎一九(戯作者)	文政3 (1820)								○	○						
13	『越後路手扣』	平田鍊胤(国学者)	文政11(1828)				○											
14	『北道遊簿』	長戸謙(美濃の儒者)	天保10(1839)	○			○			○	○							
15	『虎勢道中記』	江戸の商人	弘化4 (1847)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	『北遊紀行』	高橋克庵(水戸藩関係者か)	嘉永7 (1854)				○											
17	『西遊草』	清河八郎(出羽の尊攘派志士)	安政2 (1855)	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○

注1) 名所のうち、※印は「越後七不思議」に数えられるものを示した。  
 注2) 名所のうち、訪れた名所には○、記事にはあるが実際に訪れたかどうか明確でないものについては△で示した。  
 注3) No. 4, 8の年次は刊行年次ではなく、越後を実際に訪れた年次を示した。  
 注4) 史料名の『は江戸期に版本化されているものを、「」は版本化されていないものを示した。

に顕著な、主に日本海沿いに最短ルートを進んで、街道沿いの社寺を中心とした名所を訪れるパターンである。天和3(1683)年に全国行脚の途次に越後を通過した俳人大淀三千風は、出羽国庄内から葡萄峠を越えて、村上、新潟、弥彦、出雲崎、高田と経て越中国へ抜けた。この間、街道沿いの弘智法印、国分寺を訪れている<sup>32)</sup>。元禄2(1689)年に越後を通過した松尾芭蕉と随行した曾良や、元文4(1739)年、出羽国久保田を立てて京都に向かう途次に越後を通過した俳人建部綾足もほぼ同様のルートを取り、前者は乙宝寺、弥彦神社、弘智法印、国分寺を訪れ<sup>33)</sup>、後者は乙宝寺、弥彦神社、弘智法印を訪れている<sup>34)</sup>。

No. 6, 7, 11, 15, 17は、図1で示したいわゆる二十四輩巡拝ルートをとどりながら、「越後七不思議」を訪れるパターンである。越中国婦負郡宮尾村の長百姓内田逸峰は、歌詠みと二十四輩巡拝を兼ねて、明和元(1764)年7月中旬より閏12月12日まで、越後を経て若松－米沢－寒河江－松島－白川－鹿島－日光－江戸－富山と旅をした<sup>35)</sup>。8月11日から9月4日までの20日余ほども滞在した越後での行程概要は次のようである(●は宿泊地と泊数を示す。?は宿泊したかどうか不明確。括弧内は訪れたり、記録した越後七不思議)。

市振－糸魚川－●能生－●今町－●●柿崎－柏崎－●椎谷－●出雲崎－●●●寺泊(弘智法印)－●弥彦－●●三条－●加茂－田上(繫櫃)－湯川(油のわき出る川)－●新津－柄目木(油井、火井)－小島(八房梅)－●保田(三度栗)－●鳥屋野(逆竹)－●●●●?新潟－●新発田－山内－●新谷

これは、前述した宝暦5(1755)年『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』、明和4(1767)年『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』などが示す二十四輩巡拝の参詣地、ルートとほぼ同様

である(図1参照)。

国学者の菅江真澄は、善光寺を経て、天明4(1784)年7月30日に関川関所を越えて越後国に入り、約40日かけて越後国を縦断して出羽国に入った。その足取りは断片的であるが、やはり寺泊(弘智法印)－弥彦(弥彦神社)－三条－如法寺(火井)－新津－柄目木(油井)－小島(八房梅)、と廻ったと推察される<sup>36)</sup>。全国行脚の途次の文化13(1816)年6月11日に越中国から越後入りし、25日かけて越後を通過して出羽庄内へ抜けた日向国の山伏・野田成亮<sup>37)</sup>や、弘化4(1847)年、秩父三十四番札所巡拝を経て信州善光寺経由で越後入りし、3月20日から4月5日まで16日間を越後で過ごして出羽庄内へ抜けた江戸材木町の商人の場合もほぼ同様である<sup>38)</sup>。安政2(1855)年、伊勢参宮の途次の3月22日から4月14日まで22日間を越後で過ごして信州善光寺へ抜けた出羽国の尊攘派志士の清河八郎も、如法寺(火井)と弥彦神社には訪れていないものの、逆順ながら基本的に同様のルートをとっている<sup>39)</sup>。このうち、二十四輩巡拝の目的を兼ねたものは、越中の内田逸峰と江戸の商人の旅である。

彼らがこれらの名所とルートをどのような書物や手段で知りえたのかは明確でない。しかし、そこに示された名所とルートは、江戸時代中期以降には広く周知されており、純粋に二十四輩巡拝を目的としない旅人も採用する、越後における旅の主要なモデルルートとなっていたといえる。そして、その背景には、名所旧跡としての「越後七不思議」の存在があったといえよう。

文人層・知識人層の旅は、各地の文人と交流するなどして、前述したようなルートに規定されない、多様で複雑な行程をとる場合が多い。しかし、そのような場合でも「越後七不思議」の一部を訪れる事例が多い。とりわけ、「燃水」と「火井」はその筆頭である。江戸時代後期以降、博物学や考証学が盛んに

なったこともあって、越後七不思議の存在は注目されたと思われる。越後を訪れた彼らの多くが強い知的関心をもって見物、観察していることが以下のように多くの史料から確認される(表3参照)。

宝暦10(1760)年、常陸の地理学者・長久保赤水は、奥州旅行で出羽三山を巡った後、「越之七奇」を探ろうと来越した。赤水は越後にはついでに立ち寄ったせいなのか、事前に「越之七奇」に関する案内書類は準備していなかったようで、その所在を村上で尋ねたところ(「得聞其所在」)、①「臭水」(蒲原郡黒川村と蒲原郡柄目木村)、②「火井」(蒲原郡柄目木村)、③「八房梅」(蒲原郡小島村)、④「三度栗」(蒲原郡<sup>(ママ)</sup>安田)、⑤「逆竹」(蒲原郡鳥屋野村)、⑥「即身佛」(三島郡野積村<sup>(ママ)</sup>最上寺の弘智法印)、⑦「燃土」(頸城郡柿崎村)であった。旅程の都合もあり、①のうち蒲原郡黒川村と、②、③、④、⑤を訪ねるに止まったが、挿絵を交えて詳細な観察、考証を行っている。このうち②「火井」を特に奇とし、①の蒲原郡柄目木村を訪れなかったことを悔やんでいる<sup>40)</sup>。

宝暦12(1762)年、播州高砂の大庄屋で製塩業、廻船業も経営した三浦迂斎は、約5か月にわたって東海、奥羽、北陸を旅し、越後にも訪れた。旅の目的は、西行や芭蕉の旅をたどって和歌を作り、また、本草学・博物学に関心にある人達と情報交換することなどにあった。7月2日に出羽鼠ヶ関から越後入りし、7月26日に市振の関所を越えて越中にいたるまでの25日間越後で過ごした。この間、柄目木の火井と周辺の油井を訪れ、李時珍『本草綱目』なども引用しながら詳細に記録、考証している<sup>41)</sup>。

寛政12(1800)年頃、魚沼郡田沢村桔梗原の開田工事の検分吟味に随行して越後を訪れた江戸渋谷宮益町の名主で博物学者の亀井協従は、柄目木村の火井や油井、繫櫃、三度栗などを訪れ、博物学者らしく彩色の図入で観

察記録している<sup>42)</sup>。

文政11(1828)年4月3日、国学者平田鏡胤は、国学普及と門人獲得などを目指して越後を訪れ、5月16日まで滞在した。江戸から三国街道を経て越後入りして広範に活動を行う途次、「彼名高キ七ふしきの火を見に行く」と、如法寺の火井を訪れて詳細に観察記録し、後日「如法寺村の火を江戸へ持行む器物の用意するほどに関心を持った。また、田上から加茂に向かう途中の天ヶ沢で石油の湧く場所も見物し、未見の柄目木の油井に思いをはせている<sup>43)</sup>。

天保10(1839)年8月15日、美濃国の儒者長戸譲は、越中国から越後入りし、今町、柏崎、長岡、新潟などを経て9月1日に津川から会津方面に抜け、江戸に至った。途中、如法寺村の火井、柄目木村の火井と油井を見物し、漢籍も引用しながら考証している。後日、新潟町で越後の文人らと酒宴になると、議論は越後の「七奇」となり、自らの考えを披露している<sup>44)</sup>。

嘉永7(1854)年7月25日に江戸を立って三国峠を越えて来越した高橋克庵(水戸藩関係者か)は、各地文人と詩酒を酌み交わしながら蒲原郡水原を目指し、その途次で如法寺村の火井を見物するとともに、越後の「七奇」について詳細に記している<sup>45)</sup>。

「燃水」や「火井」を実見した感慨は、前述した清河八郎の安政2(1855)年「西遊草」に端的に表現されている。蒲原郡柄目木村の臭水油の記述は以下のものである。

山の合にある世にいふ臭水油のいづる壺を見る。松樹の側なる社の下にいづる也。六角なる井の輪の如きものをめぐらし、中より出る臭水衰々として、丈余の大釜にて湯を涌すに異ならず。其勢ひ雷の如きひびきをなし、思ふにまさる大奇物也。(中略)国の益するの一重宝なる、徒らの奇物にあらず。実に越後奇物のう

ちにも尤とも妙なる造化，奇をさぐる人  
必らず来り，一見すべき也<sup>46)</sup>（下線は筆  
者。）

なお、越後七不思議にも数えられることが  
ある「無縫塔」や「塩井」などを訪れたこと  
を示す紀行文や旅日記は本稿では提示でき  
ず、事例は少ないと予想される。これらは、  
二十四輩巡拝で示されたようなルートや越後  
の主要な街道筋から距離的に外れた場所に位  
置し、また二十四輩巡拝関係出版物にほとん  
ど記載されないことが要因と思われる<sup>47)</sup>。二  
十四輩巡拝ルートの影響力や出版文化と旅の  
大衆化の因果関係の視点からも今後の検討が  
必要である。

### (3) 越後の旅における書物の受容

越後の名所を訪れ、また、越後の旅行記を  
まとめるにあたってどのような書物が参考、  
受容されたのかは明確ではないが、以下のよ  
うな例が確認される。

寛政7(1795)年刊の橘南溪『東遊記』に  
は、宝暦10(1760)年、常陸国の地理学者・  
長久保赤水が奥州旅行で出羽三山を巡った  
後、「越之七奇」を訪れた記録である『東奥  
紀行』<sup>48)</sup>が引かれている。『東遊記』巻之五  
の越後「七不思議」のうち「弘智法印」の説  
明箇所には次のようにある。

一、弘智法印の遺骸甚だ奇物なり。諸方  
へ持出でて開帳をもなし、又、東奥紀行  
にもくわしく其事を載せて、既に印板に  
行なわれるれば、今ここに略す<sup>49)</sup>（下線は  
筆者）

ただし、橘南溪が越後を訪れたのは天明6  
(1786)年である。『東奥紀行』の刊行は寛政  
4(1792)年であるから、橘南溪は越後旅行  
時に本書を参考にしてはならず、後に『東遊  
記』を清書・刊行する際に手元に置いて参考

としたことに留意する必要がある。

文化13(1816)年、全国行脚の途次に越後  
を通過した日向国の山伏・野田成亮「日本九  
峰修行日記」は、橘南溪『東遊記』を参考と  
している。同年6月晦日の新潟湊の箇所では  
次のように引用している。

此新潟と云ふは大湊にて人家数千軒千石  
の大船を繋げり、東遊記に悉しき故に略  
す（下線は筆者）<sup>50)</sup>

さらに、同年7月5日、村上城下から出羽  
庄内に抜ける際に通過した難所「葡萄峠」の  
箇所も次のように引用している。

葡萄峠の内二里計りの処に東遊記の通り  
山中に大石立てり、高さ東遊記の通り<sup>51)</sup>  
(下線は筆者)

弘化4(1847)年3月、江戸材木町の商人  
は、江戸を出立し、秩父三十四番札所巡拝を  
経て信州・越後を経由し、東北地方まで旅し  
て「虎勢道中記」を著した。旅の目的のひとつに、  
先祖出生地である越後国蒲原郡打越村  
(新潟市西蒲区打越)訪問があった。日記中  
では著者自らを「目出度家帰路良」(めでた  
やきじろ)、供の半次を「恙無平」(つつがな  
いへい)と称し、道中の様子を彩色の挿絵入  
りで丁寧記して狂歌を添えるなど、第三者  
に読ませることを強く意識して記したと考え  
られる日記である。そして、その記載内容・  
様式には、文化12(1815)年刊の十返舎一九  
『方言修行 金草鞋』八編からの影響が推察さ  
れる箇所がある。たとえば、北国街道鯨波宿  
付近の海辺の風景についての記事を比較して  
みると、『金草鞋』では、

かしハさきよりくじらなミのゑきまで、  
一りばかりのあいだ、なミうちぎハにさ  
まざまのおもしろきかたちの大いわあま

たありて、よせくるなミのいわにあたりくだけのさま、まことにいふばかりなく、此へんすべてうミへのかいどうなれども、このあいだ、べつしてふうけいよく、めづらしきところおほし<sup>52)</sup>

とある。これに対して、「虎勢道中記」の記載は以下のとおりである。

鯨波より柏崎の間、浪うちき八にさまざまの面白き形ちの岩あまた有て、寄せくるなミの岩にあたりくだけのさま、誠にいふばかりなく、此辺すべて海辺のかいどふなれども、此間、別而景よく、珍しき所なり<sup>53)</sup>

傍線の箇所の記事が酷似しているのは偶然ではないだろう。ただし、「虎勢道中記」における越後での旅程そのものは、『金草鞋』に依拠したものではなく、主体性がみられる。

旅日記のなかには旅中に記したのではなく、帰宅後に清書しているものが多い。上記のうち、「日本九峰修行日記」は明確ではないが、『東遊記』、「虎勢道中記」はまさにそのようなものである。これに関して、清書時に引用したと考えられる書物は、越後を旅する事前に読んで旅程の参考としていたのか、そうではなく帰宅後に清書の参考のために入手したのか、といった点も関心がもたれるところである。いずれにしても、『東奥紀行』、『東遊記』、『金草鞋』のような旅行記・紀行文類の刊行は、特に文人層・知識人層にとって、情報量の乏しい越後のような地方を旅し、また記録をまとめる際の大きな参考となったと考えられる。

#### IV. おわりに

本稿では、江戸時代の旅の隆盛のもとで、旅人が訪れた越後の名所について検討した。

出版物から検討すると、18世紀中頃の二十四輩巡拝関係の道中記のなかに越後の道中も紹介され、「越後七不思議」を中心とする名所が示されていること、また、19世紀以降の講中出版の道中記や刊行越後国絵図などにも同様の記載が反映されていることを示した。

旅日記や紀行文などの分析からも、出版物に示された「越後七不思議」や街道沿いの有名な社寺を中心とする名所を、越後を訪れた旅人の多くが見て廻っていることを示した。しかし、伊勢参宮や西国巡礼の途次で越後を通過した東北地方の旅人は、いわゆる二十四輩巡拝ルートを廻って「越後七不思議」をめぐる事例は多くはなかった。一方、越後を訪れた文人層・知識人層は、比較的日程的な余裕をもっていたこともあり、江戸時代後期以降に隆盛を迎えた博物学的な関心もあまって、意識的に「越後七不思議」をめぐることが多い傾向があった。そこでは、とりわけ、「燃水」や「火井」が注目され、他国では見られない越後独特の名所として強い知的関心をもって観察、記録されている。

本稿では、越後の名所に関する基礎的なデータを提示したにとどまったが、とりわけ越後での道中について記した旅日記や紀行文は、未見の史料が多数存在する。今後、それを集積し、最新の研究視角に学びながら、一地方である越後の事例から江戸時代の旅研究を豊かにすることを課題としたい。

(新潟県立歴史博物館)

#### 〔注〕

- 1) 研究史の整理は、原淳一郎『近世社寺参詣の研究』思文閣出版、2007、4-25頁、同『近世社寺参詣史の現状と展望』『社寺参詣と庶民文化—歴史・民俗・地理学の視点から—』岩田書院、2009など参照。また、文献については、西海賢二「文献目録—旅・巡り・遊覧関係文献目録補遺」国立歴史民俗博物館研究報告155、2010、333-412頁などを参

- 照。
- 2) ①今井金吾監修『道中記集成 第1～44巻』、大空社、1996～1998。②山本光正「旅行案内書の成立と展開」国立歴史民俗博物館研究報告155、2010、109-136頁。
  - 3) 前掲2) ①第1巻所収の万治元(1658)年頃刊行といわれる『北国通名所尽』など。
  - 4) 同朋大学仏教文化研究所『二十四輩巡拝－親鸞をしたう旅－』同朋大学仏教文化研究所、2008。
  - 5) 前掲4) 39頁。
  - 6) 前掲2) ①第18巻、243-244頁。
  - 7) 前掲2) ①第18巻、251頁。
  - 8) 前掲2) ①第18巻、251-253頁。
  - 9) 新潟県教育庁社会教育課編『越後七不思議』新潟県、1964など参照。
  - 10) 嶋屋長次『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』、刊年不明、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 11) 林 英夫編『日本名所風俗図会18 諸国の巻Ⅲ』角川書店、1980。
  - 12) 前掲2) ①第29巻。
  - 13) 「越後国二十四輩御旧跡并名所之図」、刊年不明、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 14) 『浪花組道中記』、天保10(1839)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 15) 『五海道中細見記』、安政5(1858)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 16) 『関東講定休宿帳』、刊年不明、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 17) 新発田市史編纂委員会『新発田市史資料第四巻 近世庶民資料(下)』新発田市教育委員会、1969、巻頭見返し部分。
  - 18) 橘崑崙『北越奇談』野島出版、1978、4-5、7頁。
  - 19) 蒲原郡川内谷にある曹洞宗永谷寺近くを流れる早出川の東光院淵に、永谷寺住職が死去する前年になると姿をあらわすという卵型の自然石。
  - 20) 帆刈喜久男『『北越奇談』の編者橘崑崙について』『近世越後の学芸研究 第1巻』高志書院、2002、2-20頁。
  - 21) 三好唯義「南波コレクション中の刊行諸国図について」神戸市立博物館研究紀要4、1987、27～52頁。同「近世刊行国絵図の書誌的検討」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー上巻』地人書房、1988、206-225頁。ここで紹介されている神戸市立博物館蔵南波コレクション中の刊行越後国絵図十数点に、新潟県立歴史博物館蔵絵図などを加えると20点を越える存在が確認される。
  - 22) 「越後全図」、文化14(1817)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。なお、中村拓監修『日本古地図大成』講談社、1974、122-123頁に個人所蔵本が掲載され、概要が解説されている。
  - 23) 古志郡上塩村にある塩水が湧き出る井戸。
  - 24) 「越後国細見図」、天保13(1842)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 25) 「北越名所旧跡奇物名産地理案内之全図」、慶応4(1868)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 26) 『越後土産』、元治元(1864)年刊、新潟県立歴史博物館蔵。
  - 27) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」駒沢史学34、1986、144-181頁。高橋陽一「多様化する近世の旅－道中記にみる東北人の上方旅行－」歴史97、2001、105-133頁。
  - 28) 清河八郎著・小山松勝一郎校注『西遊草』岩波書店、1993。
  - 29) 倉石 梓『ある『旅日記』を読む』むげん出版、2004。
  - 30) ただし、文化13(1816)年、庄内鶴岡の高橋氏が伊勢参りの途次で、小島の八房梅、柄目木の火井、草水の石油などを訪れた事例も紹介されており(桑原孝「新発田・新潟付近の交通路」新発田郷土誌16、1987、70-84頁)、今後より多くの旅日記を集積し、分析する必要がある。
  - 31) 橘南谿著・宗政五十緒校注『東西遊記1』平凡社東洋文庫、1974、11頁。
  - 32) 『日本行脚文集』『俳諧紀行全集』博文館、1901、14-16頁。
  - 33) 松尾芭蕉著・萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道 付 曾良旅日記 奥細道菅菰抄』岩波書店、1979、117-120頁。
  - 34) 「紀行笈の若葉」建部綾足著作刊行会編『建部綾足全集 第五巻(紀行・歌集)』国書刊行会、1987、17-18頁。
  - 35) 「東路露分衣」岡村日南子『内山逸峰紀行文集』桂書房、1984、57-152頁。「式拾四輩并

- 御旧跡経廻牒」岡村日南子『内山逸峰集 享保～安永』桂書房, 1986, 117-161頁。
- 36) 田口昌樹「越後の旅」『菅江真澄』読本2』無明舎出版, 1998, 233-263頁。
- 37) 「日本九峰修行日記」『日本庶民生活史料集成 第二巻』三一書房, 1969, 162-163頁。
- 38) 「虎勢道中記」, 弘化4 (1847) 年, 国立歴史民俗博物館蔵。本史料の概要については次の文献を参考にした。国立歴史民俗博物館編『日本歴史探検③近世に生きる』福武書店, 1988, 62-63頁。新潟市市史編さん課「江戸商人の新潟見物—「虎勢道中記」の紹介—」市史にいがた16, 1995, 56-70頁。北原糸子「近世の日記に見る旅と災害—19世紀庶民の旅日記「虎勢道中記」を中心に—」年報人類文化研究のための非文字資料の体系化4, 2007, 75-91頁。
- 39) 前掲28)
- 40) 長久保赤水『東奥紀行』, 寛政4 (1792) 年刊, 新潟県立歴史博物館蔵。
- 41) 「東海済勝記」森銑三他編『隨筆百花苑13』中央公論社, 1979, 197-199頁。
- 42) 亀井協従「北越志」, 寛政12 (1800) 年頃, 新潟県立歴史博物館蔵。
- 43) 「越後路手扣」国立歴史民俗博物館研究報告122, 2005, 42-46頁。
- 44) 『北道遊簿』村山善治編『越海合本北越史料叢書10』猶興社, 1894, 6-9頁。
- 45) 『北遊紀行』『新潟県史 資料編11近世六文化編』新潟県, 1983, 941-942頁。
- 46) 前掲28), 51頁。
- 47) 「無縫塔」前掲19), 「塩井」前掲23) とも文化9 (1812) 年『北越奇談』や文化14 (1817) 年「越後全図」, 慶応4 (1868) 年「北越名所旧跡奇物名産地理案内之全図」といった刊行地図には示されている。ただし, 二十四輩巡拝関係出版物には, 無縫塔が前掲11) に紹介されている程度である。
- 48) 前掲40)。
- 49) 前掲31) 88頁。
- 50) 前掲37) 163頁。
- 51) 前掲37) 163頁。
- 52) 十返舎一九『方言修行 金草鞋』八編, 文化12 (1815) 年刊, 新潟県立歴史博物館蔵。
- 53) 前掲38)。